あとがき

今日、社会においても様々な環境問題が論じられています。文部省からも環境教育指導資料の中学校・高等学校編（1992年）、同小学校編（1993年）が刊行され、学校教育においても様々なとり組みがなされています。文部省の指導資料にも各教科における指導の指針や実践例が示されていますが環境教育として、何をどうとりあげたらよいかの結論は出せないのが実情です。本学会でも毎年、環境教育とは何かとか環境教育の在り方についてのシンポジュムや課題発表が企画され、討論が重ねられております。

環境教育は身のまわりの美化から環境や資源の保護、保全さらにアメニティの問題など広い範囲にわたるもので、それぞれの基礎的な内容をとりあげるならば教育のすべてが環境教育とかかわっています。

近年、各国の首脳や自然保護団体などが一堂に会して国連環境会議が開かれたり、ワシントン条約やラムサーム条約など国際環境条約の会議が開かれるなどして一般の関心も高まっています。環境の保護・保全に関して“サンクチュアリー（聖域）とかワイズユーズ（賢明な利用）”などという言葉や自然との共生・共存などという言葉が新聞や雑誌などでも見受けられるようになっています。これらの言葉を聞くと、自然界におけるなわばりやすみわけ、寄生や共生といった現象を連想します。人間は他の動物と違って大脳が発達し、賢明になっています。しかし、賢明故にまた愚かでもあります。したがって“賢明な利用”は“愚かな利用”と紙一重であります。

マメ科植物と根粒バクテリアのような二元的な共生関係にしても、地衣類やミドリゾウリムシのような一元的な共生体の関係にしろ、これらの生物は賢明でないかわりに愚かでもありません。根粒バクテリアは寄主のマメ科植物に副産物ともいえる余ったチッ素養分を提供するかわりに生活の場と水分や養分をもらっています。地衣類は菌類と緑藻、ミドリゾウリムシは原虫と緑藻が共生体を形成しています。これらの生物は共に人間のような賢明さがないために共存関係が成り立っていますが人間は賢明なために共存共栄は至難のわざであると思います。自然界のなわばりとかすみわけといったものは第三者から見た結果であり、共に闘争や力関係のバランスの結果生じたものである場合が多いようです。環境問題は理性的な賢明さだけでは解決できないもののように思われます。リサイクルにしてもバイオマスと金属などの地下資源とは区別して考えるなど理性的見識は必要ですが感性的、体験的、直観的といった環境認識も大切だと思います。また、法律とか条約などといった他律的なものだけでなく自律的な行動がおこせるような環境教育が望まれます。これには理性的な認識ばかりでなく、宗教や倫理・哲学をも含包した環境教育が必要のように思われます。皆様からの幅広い、多様な論議を期待しております。

現在、本学会誌は年2回発行していますが年3回さらに年4回発行できるように会員の皆様の投稿を編集委員一同お待ちしています。どうぞよろしくお願いいたします。

山田卓三

編集委員
委員長　山田　卓三
加藤　憲一
金森　正臣
狩山　廣子
北野日出男
木俣美樹男
鈴木　善次
杉浦　嘉雄
東原　昌郎
米田　　健